http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.472 19/02/12

翻訳名人

最近、「メリー・ポピンズ リターンズ」という映画が公開されて、主人が孫と一緒に見てきた。旧作の「メリー・ポピンズ」も見ている主人は、両者とも甲乙つけがたく、なかなか楽しかったと言っていたが、同時に、今回の作品に関しては、ミュージカルでありながら、どの曲も今一つ印象に残っていないのが残念とも言っていた。そういえば、ジュリー・アンドリュースが演じた「メリー・ポピンズ」には、「チム・チム・チェリー」とか「スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス（Supercalifragilisticexpialidocious）」とかいった名曲があったが、今回の新作はどうなのだろう…と言ったって、受験に忙しい君たちは見ていないだろうから、どうもピンと来ないに違いない。

実はピンと来ないのは私も同じで、上の二曲くらいは知っているが、実は旧作の「メリー・ポピンズ」も見たことがなかったのである。で、この連休中に、Amazonプライムで旧作を見てみたのだが、子どもたちが可愛らしいし、ジュリー・アンドリュースは相変わらず歌が上手だし、舞台はいかにもイギリスらしいし、ついでに英語はイギリス発音で面白いしで、楽しめる映画であった（「リターンズ」の方も見てみたくなった）。

＊

さて、今までの話は前振りで、実は私は小学生から中学生の頃にかけて、あまり読書が好きな子どもでなかったこともあり、国語の教員でありながら、誰でもが読んでいそうな基本的な作品（つまり、小学～中学時代に多くの人が読むような作品）を知らないということが結構ある。で、その一つに「ドリトル先生」シリーズがあるのだが、諸君は読んだことがあるだろうか。

ドリトル先生シリーズ（原題では「Doctor Dolittle」となっている）は、アメリカの児童文学・絵本作家ヒュー・ロフティングが、第一次世界大戦中、出征先の西アフリカの塹壕の中で、我が子のために書きはじめ全13巻の作品である。98年にはエディ・マーフィ主演で映画（67年に作られた映画のリメイク）にもなっているくらいで、欧米でも有名な作品らしいのだが、それでも全13巻が今なお書店の棚に並んでいるのは日本くらいらしい。それほど日本でこの作品は受け入れられているのだが、それが実は翻訳のうまさにあるのではないかと言われている。さて、このシリーズを翻訳したのは誰？　中学校や高校の国語教科書に登場する有名作家である。

答えは「井伏鱒二」。「山椒魚」や「黒い雨」といった作品が教科書では取り上げられているし、太宰治の「富岳百景」にも登場する。また、漢文の教科書には于武陵「勧酒」の訳がよく掲載されている。

勧君金屈酒　コノサカヅキヲ受ケテクレ
満酌不須辞　ドウゾナミナミツガシテオクレ
花発多風雨　ハナニアラシノタトヘモアルゾ
人生足別離　「サヨナラ」ダケガ人生ダ

この訳を見ても、翻訳家としての才能に恵まれていたことが伺われる。そもそも「Dolittle」（ドゥーリトル）を「ドリトル」と訳したところにも、鋭い言語感覚があるというべきだろう。

2013年の東大の問題が「翻訳」を扱っていたので、何となく思い出した。